

ベルクソンに於ける、持続と知性

亀 喜 信

第1章 持続と知性

ベルクソンは、実在の動性 (mobilité) を強調する哲学者である。例えば、我々の意識に於て、様々な状態が、不可分に浸透しあいつつ流れている。それらの状態は、現在の状態に不可分に結びついて、そこに各自の過去の生全体を反映している。我々の意識は、自らの歴史を担っている。

「一切が流れているなら、何も存続しないのではないか。」と思われるかも知れない。しかし、意識に於ては、一切が流れつつも現在に反映され、そこにはたらいっており、流れ去る事は決して無い。人間の性格というのも、過去の生全体の現在へのはたらきであり、それ故、人によって独自ののである。

内的生に於ては何も消え去らないという事情を、ベルクソンはまた、記憶 (mémoire) とも呼ぶ。「意識とは、記憶を意味する。」¹⁾ 過去の生の不可分な全体としてのこの記憶から、一定の時点、一定の場面の思出 (souvenir)²⁾ が浮び上がって、意識に頭われたりする。この内的生の動きを、ベルクソンは持続と呼ぶ。

持続は、過去の生を背負って増大していくが、それは決して量的な、加法的な増大ではない。量とは、加えたり引いたり、重ね合わせたり出来るものである。しかし、持続に於ては、一切の出来事が不可分に浸透し合い、そこには数えられる様な判明な要素は無く、重ねたりする事も出来ない。持続とは質的事象であり、各々独自のものであるから、比較・計量は出来ない。

ベルクソンが自由を位置づけるのも、持続の内である。自由とは、自分の過去の生全体が凝集し、或る行為へと結実される事である。内的生全体が挙って反映される行為を模索し、実現する事である。A と B との間で迷っている時、A への傾向と B への傾向とに自己が分断されていくのでは、自由は実現出来な

い。A と B との間で迷うのは、どちらの方に、過去の経験全体が挙って「然り」を言うかを、自らに問うているのである。「自由な決定が生じるのは、實際心の全体からである。」³⁾

以上の様に、内的生の持続、動性を強調するベルクソンは、「生の哲学者」と呼ばれる。と同時に、持続は知性で捉えられないという主張の為、彼は「反知性主義」とも目された。しかし、問題は彼の想定している知性の中味であって、それを知らずに「反知性主義」のレツテルに囚われるのは危険であろう。

ベルクソンは、知性を、先ず生存の為の道具と考える。それは、対象に対し、どんな態度や行動をとるべきかを示すはたらきであって、純粋に、知る為に知るのではない。我々は既に、多くの事物について、その用い方、対応の仕方を身につけて覚えている。知性は、そうした既知の事物のどの種類に対象が当てはまるかを教える。言い換えれば、既知の事物の概念へと対象を分析し、その概念で対象を再構成しようとする。「対象に概念の札を貼る事は、対象が我々に示唆する筈の行動や態度の種類を、正確な言葉で表す事である。」⁴⁾

知性は、既製の概念に基づく分析のはたらきである。それは意識を、「多」や「一」といった、固定した概念の内に捉えんとする。しかし、動きを固定した点（位置）で再構成出来ない事を、ベルクソンは繰り返して強調した。彼は、ゼノンの「飛んでいる矢」のパラドックスを好んで取り上げる。このパラドックスも、矢の不可分な運動を、発射点と的中点への動き、残った距離の中間点への動きという風に、位置を並べて再構成しようとする事に起因する。意識とは、不可分な動きであって、固定した概念を繰る知性には捉えられない。

ベルクソンが言葉を問題にするのも、同じ事情である。人間は、生きていく上で他の人々と協力せねばならず、その場合意思の疎通が要る。伝達の道具としての言葉は、それを使用する人々に共通の意味を持ち、「私は悲しい。」と言えば、そこで意味されている事が、私の内的感情そのものであろうと、相手の優しい対応の要求であろうと、ともかく伝達が成り立つ限り、その言葉は使用者に共通の事柄を示している。ところが、内的生は各々独自の質であり、共通な言葉を連ねて表わせるものでないとベルクソンは考える。例えば、「喜びと悲しみとが私の内で争っている。」という日常的表現は、「喜び」と「悲しみ」

という、二つの固定した、共通の要素へと持続を分解し、「争う」という大雑把な概念でそれを再構成しようとする。実際我々は、そういった世間で流通している枠組を介して、平生自分を理解している。ベルクソンは、そういった態度では、持続は捉えられないと考える。

それでは、持続や動性と、知性や概念とを、全く没交渉なものとして放っておいていいのだろうか。「持続は言葉では表わせない。」と言って、其限でいいのだろうか。

ベルクソンは、既製の概念の適用に止まる知性では、持続を構成できないと言っているのであって、持続から、言葉や心像⁵⁾へと到る精神の動きを否定していない。芸術家が独自の印象を得、それを言葉や音に表現する時、単一な動性が、安定した「かたち」へと動く。その動きの中で、あらためて知性を捉え直す必要がある。以下、ベルクソンの著作に即して、この作業を試みる。

第2章 意識の様々な平面

動的な持続（＝記憶）と、固定した知覚との間の精神の動きを捉える為、先ず『物質と記憶』で展開される、再認のプロセスを辿ってみる。

知覚の再認を説明する上で、観念連合説は、知覚と記憶心像とを、各々独立な固定したものと想定し、それらが類似や近接によって結びつくと考える。しかし、どんな記憶心像であろうと、十分抽象を行えば、知覚と類似している所は必ずある。また、Aの知覚から、近接によってBの記憶を想起するのも、実際には先ずAと類似する記憶を想起し、それとの近接でBの記憶が想起される。結局、どんな記憶も類似によって知覚に結びつけるのだから、或る知覚が何故特に特定の記憶と結びつくのか説明できないとベルクソンは批判する。

では、彼は再認をどう説明するか。先ず第1に、再認の役割は、知覚を明確にして、行動の選択をより有効・適切にする事にある。「生きものの関心は、現在の状況の内に、以前の状況に似たものを捉え、(中略)過去の経験を利用する事である。」⁶⁾それ故、再認は類似によって行われるとしても、それは「行動に関わる類似」であり、これを見出す枠となるのが、運動図式 (schème moteur) である。ベルクソンは、言語聲に関する幾つかの報告をもとに、知覚

の際立った輪郭を模倣する運動傾向を想定する。この模倣運動が、知覚と記憶との共通の枠、図式となり、これに当てはまる記憶のみが選ばれて知覚に重なり、知覚の細部が明らかになる。

第2に、「我々の全人格は、我々の記憶全体を伴って、不可分なまま、現在の知覚の内に入ってくる。」⁷⁾ 独立した個々の思出が先ずあって、それを知覚が、何か得体の知れない力で引き寄せるのではない。記憶の全体が、図式を手掛に、知覚へと動くのであり、その動きは二種に分れる。一つは、記憶の全体が、不可分なまま収縮する運動、即ち、望遠鏡の倍率を下げる時の様に、細部を背景に押しやる運動（並進 translation）。他方は、記憶が現在の状況に定位し、それに最も有用な面を示す運動（回転 rotation）。記憶の全体が、様々な程度に収縮し、その或る一面のみが浮かび上がって、意識に顕われる。収縮が大きい程、記憶はありきたりになり、逆に拡張して細部までありありと描き出される程、それは人格を反映する。「記憶には、それ故、緊張或いは活力の、継起的かつ分明的な幾つもの段階がある。」⁸⁾ この記憶の緊張の段階の各々が、意識の様々な平面を形成する。

この平面の一方の極に、過去の生のあらゆる出来事が細大洩らさず現われている。また他の極は、知覚が適切な反作用と結びつく、感覚—運動機能に結びつく。「精神は、自らの二つの極限、即ち行動の平面と夢の平面との間の隔を、絶えず走り回っている。」⁹⁾ 過去の生が、何ら将来の行動を顧慮せず、細部まで無差別に顕にしている状態は、夢の状態である。肝心なのは、過去の生全体が、行動の平面へと動く事である。

第1章で、自由は過去の生全体が行為へと結実し、そこに反映する事であると書いた。しかし、「行為は、現実の状況——身体の時空に於ける一定の位置から生じる、諸事情の全体——の内にはまり込んで来る時にのみ、実現可能であろう。」¹⁰⁾ 過去の生の全体と、現実の状況との間の動きの中で、自由が可能となる。この動きを欠いた、夢の平面の中での心の浮動は、何らの行為も強いられない、およそ能動性といったものを伴わない、無差別の自由でしかないだろう。（そういった状態も、一つの大切な心の在り方かも知れないが。）

身体が状況の内に座を占めている事によってはじめて、自由が可能となり、

道具を使用する事も出来る。身体は、状況が開かれ、行為が可能となる根本制約であって、道具ではない。

では、過去の生を行為へと凝集するとは、具体的にはどうする事か。ベルクソンの著作に、立ち入った言及は見当らない。それは、過去の様々な経験に、現在の都合に合わせて、価値の序列をつけ、うまく折り合いをつける事ではあるまい。確かに、我々は社会で生活を営みつつ、そこで流通している価値観を身につけ、それを前提にして、自分の経験に大雑把な序列付けをしている。我我は、社会を通して自分を見ている。その限り、過去の生の凝集と力んでも、社会通念をなぞる以上の事は出来ないかも知れない。それでもやはり、我々の経験は多様であり、そこには、互いに矛盾する価値観を生む様な経験も含まれてはいまいか。平生、我々はそれらの矛盾を無視して、とりあえず社会規範や習慣に従って生きている。先ず、自分の内なる様々な矛盾と相対する事から始める必要がある。その為には、ダラダラと流れていく、混沌とした日常——そういった流れは、決してベルクソンの考える持続ではない——の孕む矛盾を、はっきりと言葉で表現する努力が要ると思う。勿論、表現という作業が自分を誤解させたり、擬似問題を生んだりする危険はある。しかし、避けて通れない危険もある。

矛盾を明確にする為には、知性や言葉は不可欠である。この知性が、固定した言葉の内に、多様な経験を表現し、分析する事は、ベルクソンの想定と違わない。また、その用いる言葉、概念も、当面は出来合であろう。一切の社会的、歴史的制約を免れた、純粋知性へと一挙に身を移す事など、ここでは問題外である。けれども、矛盾を表現し、解決する努力は、表現の前提たる概念そのものの変容を引き起こすだろう。表現は、その前提そのものをも明るみに出してくる。矛盾の解決は、矛盾を設定する視点そのものの批判と結びつく。この時知性は、動きを点に分析して終わる、静的なものではない。概念の批判へと媒介する知性である。

「持続は言葉で捉えられない。」と言ってしまえば其限である。しかし、言葉に表現する事を通して、そこに表現しきれていないものが、明らかに自覚されてくる。また、表現によって、他の人々からの批判の可能性が開ける。表現

によって矛盾を明確にしつつ、表現の前提自身にも批判を向ける、このプロセスを繰り返す事によって生の凝集が少しずつ回復され、そこから再び、内的生のより深い矛盾が見えてくるのではないか。表現や知性が持続を構成出来ないにしても、持続を窒息させている諸々の概念は、表現を介してのみ変容され得るのではないか。ベルクソンが、『創造的進化』の中で、「エラン・ヴィタール」という思想に到達したのは、多くの進化学説を、根気よく研究する事を通してであった。

先に再認に関して述べた精神の動きを、言葉の理解というはたらきに即して考え直してみる。

人が話している時、ベルクソンによれば、聞き手は、先ず相手の思想に対応するであろう思想の内に身を置き、次いでその思想が記憶心像に具体化されつつ、図式を介して音の知覚へと重なっていく。言葉（parole）は、並置された語から成るのだから、思想の動きの主要な段階に目印を付けるだけである。聞き手は、先ず思想の内に身を置き、言葉を道標の様に用いつつ、相手の思想を追う。

ここでもまた、ベルクソンは、思想を動きとして、言葉を固定したものとして捉えている。しかし、言葉が並置された単語から成ると考えるのは疑問である。確かに、習いたての外国語を聞く時、個々の単語にばかり気をとられて、それらの意味を繋ぎ合わせて、文の意味を拵えようとしている。しかし、母国語を聞く時、先ず文や節の中で単語を捉えていると言った方が、適切であろう。それにしても、人と話をしていて、自分の考えをうまく表現出来ないのに、相手がこちらの意を汲んでくれて、適切に表現してくれる事がある。勿論、言葉や表現から全く独立な思想というのは疑わしいにしても、思想と表現とのギャップはやはりある。その意味で、ベルクソンが、相手の思想に対応する思想に先ず身を置き、そこから言葉へと動くのだと言うのにも、一理はあると思う。

また、例えば誰かの詩を読む場合、詩の中の個々の単語の辞書の意味を知っていれば、とにかくそれは読める。ところが我々は、自分の理解が浅いのではないかと考えて、何度もそれを読み返してみる。その時、我々は、個々の単語の意味を、辞書的なものから、もっと深めようとしているが、それは、詩の全

体から単語の意味を解釈する事ではないか。そこで言われている「詩の全体」とは、詩に表現された、詩人の想念そのものではないか。勿論、相手の思想がそう容易く知れる筈はない。詩の理解も、とりあえず、言葉の辞書的意味を手掛に、詩の全体の単純な印象の内に身を置き、そこから再び個々の単語の意味を解釈し直して、また全体の印象が変容するといった作業を繰り返さなければならない。先ず思想に到って、そこから言葉に移行するにしても、言葉への移行が、再び思想に到る為の契機たり得る。このプロセスは、相手の思想が独自の、その人の人格の色合を帯びたものである程、困難であろう。

以上、『物質と記憶』を手掛りに、過去の生の不可分な全体（記憶）と、具体的な個々の知覚との間の精神の動きを辿ってきた。それはまた、意識の様々な平面を貫く精神の動きとも言える。この動きによって、内的生の全体は、現在の状況に定位しつつ、知覚に重なったり、自由な行為の内に実現されたりする。次に、この動きと知性との連関を探る必要がある。

第3章 知的努力

ここでは、『物質と記憶』の6年後に発表された、『知的努力』という短い論文をもとに、精神の動きを、その創造的なはたらきの場面で捉えてみる。

ベルクソンによれば、音楽家や詩人などは、先ず精神の内に、何か単純で形を成していないものを持つ。「それは、音楽家や詩人にとって、音や心像へと展開すべき、新しい印象である。」¹¹⁾ ベルクソンは、この単純な印象を図式と呼び、それは、「心像そのものより、心像を再構成する為にすべき事の指示を含む。」¹²⁾ それは、「心像を呼び出す仕事の内に現われ、はたらいている。」¹³⁾ この単純で、具体性を欠いた図式から、心像へと向かって、様々な意識の平面を通過して動く事に、知的努力が存する。ここで言われる図式は、前章で出てきた、知覚に伴う模倣運動（運動図式）の様に、記憶と知覚との共通の枠ではない。それ自身心像へと動き、実現されていく、「動的図式 (schéma dynamique)」である。

注目されるべきは、この図式と心像との関係が、決して一方的でない点である。「図式は、それによって満たされようとしている心像によって、変容され

る。』¹⁴⁾ この点にこそ、創造的作業が予見不可能な理由がある。更に、図式が心像に先行する必要もない。図式が漠然としか捉えられておらず、それが引き寄せるはずの心像によって、初めてしっかりと把握される場合もある。

この二つの指摘は重要である。ベルクソンは、動的実在、全ての要素が不可分に浸透し合った動きを先ず置いて、それが固定した概念や知性で捉えられぬと言う。しかし、その動的実在とは、そもそも自明なものとして、既に与えられているのだろうか。意識の持続と一口に言っても、様々なレベルがあり、内的生全体が凝集して、自由行為となる様な状態は、容易に実現出来ない。前章で述べた様に、概念や心像への表現、それらとの緊張を契機として実現されていく動性が在ると思う。概念を並べても持続にはならない。しかし、持続は、より緊密になり、人格の全体を反映する実在となる為、概念への表現を媒介とする事が必要ではないか。

再認の場合と同様、創造的はたらきに関しても、精神は意識の様々な平面を動く。この動きによって、精神は、様々なレベルで人格の色合を帯びた、具体的な心像の内に、動的図式を実現していく。『知的努力』の中で、ベルクソンは、既製の概念のみを扱い、過去をそのまま反復する知性に対し、「過去の経験を、現在の輪郭に即して曲げながら用いる事の出来る、柔軟な知性」¹⁵⁾を語る。その知性は、心像の他に、図式を必要とする。つまり、知性は、図式と心像との間の動きに関わる。

肝心なのは、精神の様々なはたらきを、いかに詳細に、しかも遺漏無く見ているかであって、そのどれにどんな名前を付けるかは大きな問題ではない。ベルクソンに「反知性主義」のレッテルを貼るなら、彼が上述の精神の動き（名前はともかく）を充分承知していた事を弁えた上で、そうする必要はある。

第4章 道徳と知性

ベルクソンは、『道徳と宗教との二源泉』の中で、道徳の源泉を、本質的に異なる二つに分つ。ここでは、その論旨を大雑把に辿り、知性との連関を調べてみる。

道徳の源泉の一つは、社会的習慣の体系である。それは、子供の頃から教え

込まれ、身についた習慣——社会での振舞いや考えに関わる——の総体である。これらの習慣は、共同体の成員によって共有されてその結束を固め、ひいては共同体の維持に役立つ。この習慣体系から成る道徳は、それ故、共同体の安定、維持を眼目とし、それを脅かす存在（個人であれ集団であれ）に対する敵意や憎しみと、容易く結びつく事が出来る。「我々が、一緒に生活する人々を愛するのは、先ずそれ以外の全ての人々に対抗してである。」¹⁶⁾ この道徳は、習慣として身につけているから、遵守するのはそう困難ではないが、一度それに抵抗しようとするれば、共同体全体の反発を受ける。この道徳は、それ故、「圧力」によって人々の生活を支配する。

道徳の他の源泉は、神秘主義である。これは、一切の敵意、憎しみを排除する純然たる愛に基づき、この愛は、対象によって引き起こされる受動的な愛ではなく、無差別に、どんな対象にも及ぶ。習慣体系の中で語られる愛は、家族への愛や祖国愛など、一定の対象に拘束されたものである。この愛は、集団の維持を目的とし、他の集団への憎しみと結びつき得るものであって、神秘主義の愛とは本質的に違う。家族愛から祖国愛へと、その対象を拡大していっても、純然たる愛には到らない。習慣体系は「閉じた」道徳であり、神秘主義は「開いた」道徳である。習慣体系が、共同体の成員に共有されるのに対し、神秘主義は、特定の人物（神秘家）に具現される。神秘家は、人々に強いる事はなく、しかも人々は、彼に従おうとする「熱望 (aspiration)」を抱く。

ベルクソンが道徳的責務の土台に置くのは、上に述べた圧力と熱望とであり、両者とも知性からは独立である。ところが、両者は実際には混りあい、知性によって、例えば「愛」や「親切」といった、一つの概念に纏められてしまう。そして我々は、平生概念しか意識しない為、肝心の圧力と熱望——これらが実際に意志にはたらきかける——が見失われる。ここから、知性が意志を規定すると錯覚し、知性で道徳を基礎づける考え方が生じるとベルクソンは考える。彼も、知性が意志に影響を与え得る事は否定しない。しかし、その力はあまりにも弱く、人間を動かすには足りない。哲学者は、理性の名のもとに同胞愛を説く。「それ程高尚な理想を前にして、人は尊敬を抱いて頭を垂れるだろう。個人や共同体にとって、煩わし過ぎるというのでなければ、人はその理想を実

現せんと努めましょう。しかし、人は情熱を抱いてそれに打ち込みはずまい。」¹⁷⁾

しかし、神秘主義に知性が全く不要とは、ベルクソンは考えない。神秘家の愛は、冷え固まって、宗教の教義の内に結晶する。「宗教の教義は、実際、あらゆる教え同様、知性に語りかけるのであり、知性の秩序に属するものは、全ての人々に近づき易くなる事が出来る。」¹⁸⁾ 歴史上の幾人も神秘家の愛は、宗教の教義として存続し、薄められつつも、人々の間に広まっていく。「神秘家が自分の前に見出すのは、それ故、他の神秘家達により、彼の言葉を聴く準備をされた人類である。」¹⁹⁾ 神秘家自身、この宗教から出発したのである。

知性は、それ自身では、人を動かす強い力は持たない。しかし、神秘家の愛を、たとえ薄められた形であろうと、人々に近づき易くし、更に次なる神秘家の出現の土壌を準備する。人は生きていく為、大なり小なり共同体を形成する必要がある、共同体の間に、争い——経済的なものばかりでなく、思想的、宗教的対立も含めて——が絶えないのは、今も変りない。その様な事情の中で、神秘家の愛が一挙に広められる筈もない。神秘家の愛を、敢えて知性の言葉に表わし、人々の間に広めつつ、次の神秘家の為に、少しでもましな土壌を用意する必要があるというのが、ベルクソンの考えだろう。

結 び

「知る」というのはたつきは、実に多様である。ベルクソンは、一方で、対象を既知の要素、固定した概念に分析する、知性という知り方を置く。しかし、持続という、質的多様性に満ちた流れは、知性では捉えられず、それを知るには直観が要ると言う。これは、動きを外から、固定した観点から眺めず、動きを内から感じる知り方（在り方）であり、対象との共感（sympathie）とも呼ばれる。しかし、知性と直観とは両極端の知り方、態度であり、両者を媒介する知り方、精神の動きがある筈である。いきなり直観に到れる訳ではないだろう。動的実在を概念に表現して、両者の隔たりが明確になり、それを通して概念自身の変容し、実在の動性が更に緊密に、豊かになる、そういう知り方もあるのではないか。そうした作業を経ず、心の流れに身を任せていても、持続を感じる事は出来るかも知れないが、その持続とは、弛緩した、無気力なものだ

ろう。既製の概念しか用いない知性と同様、その持続は何も新しいものを生みはしない。毎日の習慣に身を任せた生活の中でも、やはり意識は持続していると言えよう。しかし、ベルクソンの考える持続とは、過去の生が現在に反映しつつ、不断に新しいものを形成していく、創造的なものである。そういった持続は、所与として感じられるものでなく、自らの努力で実現しつつ、それと一つになって動かなければならない様なものだろう。持続と心像、概念との間の精神の動き——概念を爰容し、持続の凝集を促す動き——を通して、創造的な持続を、その内から捉える可能性も開けてくるのではないか。知性を、この精神の動きとして捉えていく方向が、ベルクソンの思想そのものの内に示唆されていると思われる。

〔註〕

- 1) *La pensée et le mouvant*, p. 183 (以下、引用ページは全て P. U. F. 版単行本のものである。)
- 2) ベルクソンは、意図せず (spontané) 蓄積されていく記憶 (souvenir-image) と、反復によって、意図的に蓄積される記憶 (souvenir-moteur) とをはっきりと区別する。
- 3) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, p. 125.
- 4) *La pensée et le mouvant*, p. 199.
- 5) ベルクソンは、『物質と記憶』第1章に於て、独自の知覚論を展開し、image という語を特殊な意味で用いる。しかし、以下用いる「心像」という語は、記憶や想像の image であり、「意識の内に思い浮かべられた、具体的な像」という、普通の意味で理解して頂きたい。
- 6) *Matière et mémoire*, pp. 272-3.
- 7) *ibid.*, p. 184.
- 8) *ibid.*, p. 189.
- 9) *ibid.*, p. 192.
- 10) *ibid.*
- 11) *L'énergie spirituelle*, p. 175.
- 12) *ibid.*, p. 161.
- 13) *ibid.*, p. 188.
- 14) *ibid.*, p. 175.
- 15) *ibid.*, p. 188.
- 16) *Les deux sources de la morale et de la religion*, p. 28.

17) *ibid.*, p. 247.

18) *ibid.*, p. 251.

19) *ibid.*, p. 253.

(かめき まこと 博士後期課程二回生)